ゴシックは魔法乙女

―― さっさと契約しなさい！ ――

第0章　嵐の前に

cave

© 2015 CAVE Interactive CO.,LTD.

『プロローグ』

それは、ほんの少しだけ、昔の話。

けれども、もう二度と戻らない、過去のお話。

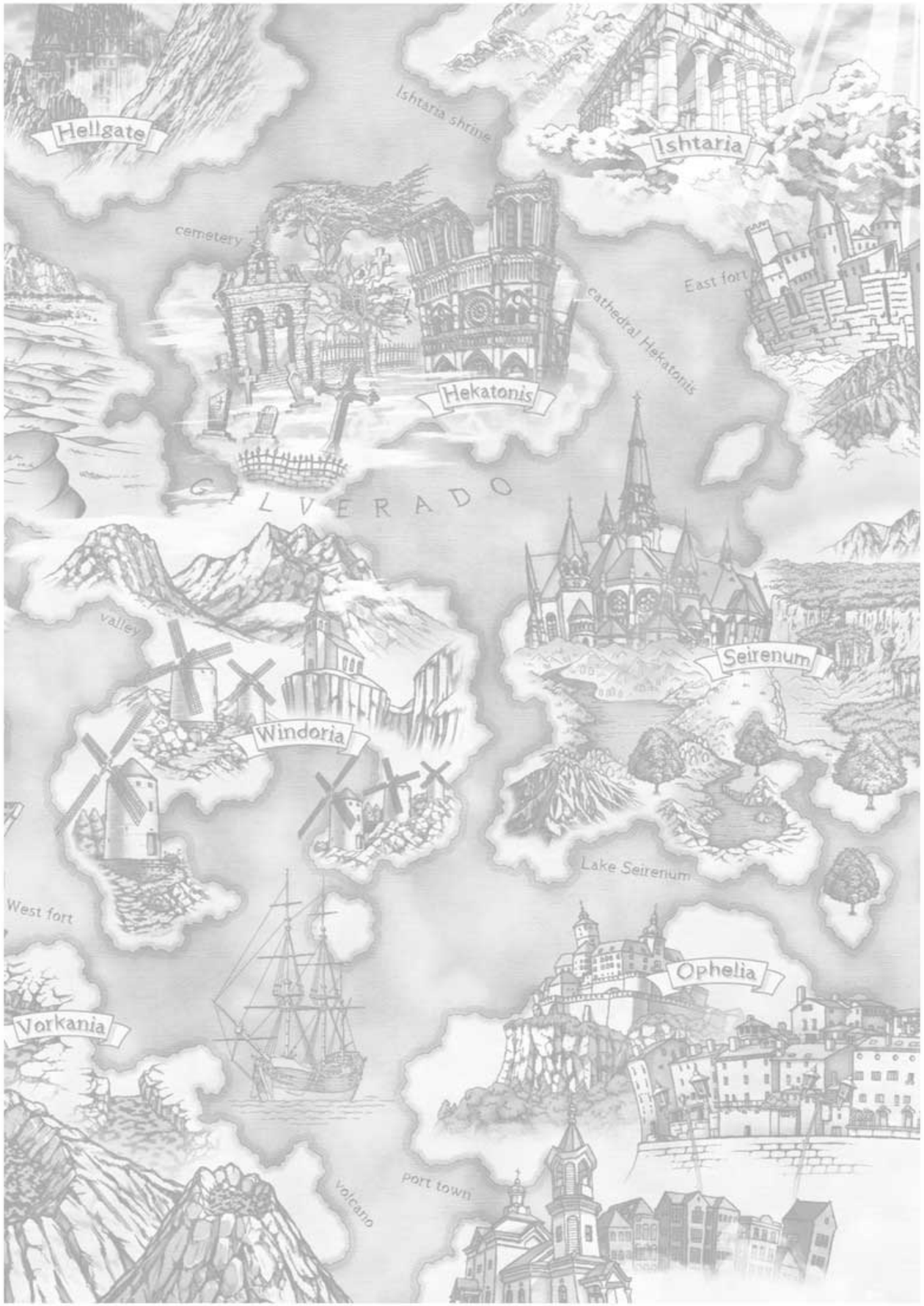
ジルバラードがまだ天使たちによって、その平和を保たれていた頃。

ヴォルカニアに。
セイレニウムに。
ウィンドリアに。
イシュタリアに。
そして、ヘカトニスに。

可憐な乙女達の姿があった。

それぞれに日々を過ごし、家族と、友人と、何の変哲も無い日常を送っている。
泣き、笑い、時にため息をつき。しかし、平和に。
それが、どれだけかけがえのないものだったか、気づくこともなく。

その日がくるまで、誰一人。
その後の数奇すぎる運命など、知る由もなかったのだ——。



『僕のお姫様』

その日のヴォルカニアは、少し汗ばむような陽気だった。
公園の噴水が、陽光にキラキラと輝いている。遠くには、僕らの街のシンボルである火山の、赤い剥き出しの地肌がはっきりと見えていた。
「ねぇねぇ、サツキ。……私、やっぱり自信ないよ～」
僕のシャツの袖をつまんで訴えるのは、幼馴染みのラナンだ。
「サツキが王子様なのはいつものことだし、納得するけど……私がお姫様なんて」
ラナンが言っているのは、今度のお祭りで僕らがやる余興での配役のことだ。
毎年、街の若い女の子たちだけで、ちょっとしたお芝居をする。そして、今年の王子様役は僕で、お姫様役にラナンが先ほど選ばれたばかりだった。
「不安がる必要なんてないよ。だって、ラナン以外、僕のお姫様役なんてありえないでしょう？」
僕がそう笑いかけると、ラナンはなんだか頬を染めて。
「そ、そうかな？　えへへ」
小首を傾げて、目を細めて笑った。赤い綺麗な髪が、持ち主同様に元気いっぱいに揺れる。
可愛くて、可憐なラナン。本当に、こんなにお姫様にぴったりな子なんて、いないのに。
小さい頃から、いつも一緒だった。男の子に意地悪されて、ラナンが泣く度に、僕が守ってあげてきた。
今は、身体つきもすんなりと女性らしくなって、それでいて華奢なままの手足は、強く握ったら折れてしまいそうだと思う。
僕はといえば、身長ばかりどんどん伸びて、同い年の男は軒並み見下ろせるくらいだ。いつまでたっても、初めて会った人には、男性と間違えられる。……慣れたけどね。
「でも、そうよね。選ばれた以上は、頑張らなくっちゃね！」
一転して元気よく言うと、ぴょんっとラナンは噴水の石縁に飛び乗る。でも。
「……きゃっ」
「ラナン！」
バランスを崩した彼女を、僕は咄嗟に腕を伸ばして抱き留めた。ラナンは軽いから、これくらいなんでもない。
「足元には気を付けて？　まったくもう……」
「え、えへ。だって、サツキがいるから大丈夫かなーって。……これからも守ってね？　王子様」
イタズラっぽく笑われたら、怒るに怒れない。
「わかった。約束するよ」
「うん！　……あ。いっけない。そろそろ時間だわ」
今日はこれから、父親と約束があるのだと、僕も聴いている。なんでも、一緒に神殿に行くらしい。
僕はあまり父親は好きじゃないけど、ラナンはお父さんが大好きだから、とても楽しみにしている様子だ。
「じゃあ、明日から練習、頑張ろうね」
「うん。気を付けて行っておいで、ラナン」
「はーい！」
ラナンが、明るく答える。僕の、大好きな笑顔で。

……。
どうして、あのとき、その手を離してしまったんだろう。
神殿に行くという彼女を、ただ見送ったりしたんだろう。
――僕は今も、そのことを、ただひたすら悔やんでいる。

『憧れのニンゲン』

くるしい。
いたい。

いつものお散歩にでただけだったつもりなのに。
なんでこんなことになってんの??
あんまり人の来ない岩場で、一休みしたけど。でも、痛いよぅ。
「……あら……?」
誰か来た。ニンゲンだ。やだよぅ、掴まっちゃう!!
おばさんが言ってた。
『アマモ、よくお聞き。ニンゲンはね、オットセイを見ると、捕まえて食べちゃうんだよ。だから、すぐ逃げないと』
うわぁん、どうしよぉ。……でも、痛いし、動けないよぅ。
「オットセイさん……怪我、してるの……? 可哀相に……」
「……あぅ……」
「大丈夫よ……少し、じっとしてて……」
ニンゲンの、あったかい手が、あたいに触れた。
しばらくしたら、あたいに絡まってた、痛い痛い棘がついた紐みたいなのがなくなる。ニンゲンが、取ってくれたみたいだった。
「……私の水筒の水があるから……傷口も、洗っておこうね。痛かったでしょう……?」
……ちょろちょろって、水で、あたいの痛いところを、ニンゲンが洗ってくれる。
その顔は、なんか、ニンゲンも痛そうだった。
なんで? あんたも、痛いの??
あたい、さっきより痛くないよ。だから、もーいいよ?
「あぉ、あぅっ」

「痛いの? ……もう、大丈夫よ。ごめんね、誰かの釣り竿が、そのままになってたのね」
また、ニンゲンが、あたいを撫でてくれた。
なんか、すごく、良い気持ち。良い匂い。
それに、このニンゲンって、すごくきれい。たぶん、あたいが今まで見たニンゲンのなかでも、一番かも。
でもなんで、ひとりなのかなぁ? ニンゲンって、いっつも、わいわい群れてるのに。はぐれちゃったのかな?
「ここは……静かでいいね。……私、あんまり人が多いの、得意じゃないから……」
キレイなニンゲンは、寂しそうに、下を向いちゃった。
なにを言ってるのか、よくわかんないけど。なんか……。
――あたいが、ニンゲンだったら、いいのになぁ。そうしたら、こんな顔、させないのになぁ。
「あぅ、あうっ?」
ねーねー、あたいの言葉、わかんないかなぁ。あたいね、アマモって、いうんだよ。
ニンゲンは、ただ、優しい目であたいを見てる。その目を見てると、なんだか、不思議な気持ちがした。なんだろう、これ。ふわふわ、あったかい波に浮かんでるとき、みたい。
「お父さん、今頃沖かしら。……あら、雨が降ってきた」
ニンゲンが、海のほうを見る。
……なんだか、変な色をしてた。今まで、見たことない、色。さっきまでのふわふわした気持ちが、ぺしゃんこに潰れる。ざわざわ。やな感じの、空と海。
あたいはそれを、キレイなニンゲンと一緒に、ただ、じっと見ていた。
あの、おっきな、おっきな、波が来るまで。

『大切なお嬢様』

「鈴蘭！　鈴蘭～!!」
お家の中から、可愛らしい声が聞こえます。
私は竹箒を動かす手を止めて、庭からお屋敷へ続く窓辺へと向かいました。
「スフレお嬢様、どうかしましたか？」
「あのね、あのね、私のメロディちゃんがいないの」
スフレお嬢様が、半泣きで私を見上げています。お可哀相ですが、その表情もまた可愛らしくてたまりません。私は竹箒を庭先に置くと、サンダルを脱いで室内に戻りました。
メロディちゃんとは、スフレお嬢様が大切にしているクマのぬいぐるみです。お母様に、誕生日にいただいて以来ずっと、いつでもスフレお嬢様のお手元にありました。どれほど大切なのかは、私もよく存じています。
「では、ご一緒にお探ししましょうね。お嬢様」
「ありがとぅ……」
スフレお嬢様の手をとって、私はまずはお嬢様のお部屋に向かうことにしました。

私の身分は、学生です。ですが、この家でこうして家事手伝いをしているのは、学費の援助をしていただいている、そのほんのお礼なのでした。
経済を学ぶ一方で、家事をするのは、なかなかに忙しいことです。けれども、時間の使い方を学ぶという勉強になります。……なにより、こうして、スフレお嬢様といる時間は、私にとって幸せなのです。
「あらあら、お嬢様……だいぶ、ちらかしましたね」
「だ、だって、メロディちゃん探してたんだもんっ。でも、いないのっ」
お嬢様の言うとおり、ベッドの毛布は裏返され、枕は落とされ、クローゼットの洋服も引っ張り出されて、お部屋はめちゃくちゃです。まぁこれは、あとで私がゆっくり片付ければ良いことですけども。それよりも。
「では、スフレお嬢様。最後にメロディちゃんを見たのは、どこですか？」
「最後に？　……えーと……うーんと……」
眉根を寄せて、可愛らしくお嬢様は首を捻っています。暫くして、ようやく。
「あ！　そういえばね、一緒にお風呂に入ろうと思ったの！」
「そうですか、では……」
スフレお嬢様の部屋のベランダに出ると、そこには、お人形の椅子にちょこと座ったクマのぬいぐるみがいました。爽やかな風に吹かれ、お日様にあたってふかふかです。たぶん、湿ってしまったので、干したものの、お忘れになってしまったのでしょう。
「わぁい！　メロディちゃん、いた!!」
「良かったですね、スフレお嬢様」
「うん！　これで、お出かけできるよ～」
折良く、階下から旦那様の声がしました。もうすぐ、お出かけになるのでしょう。今日はこれから、ご家族の皆様で、ピクニックなのです。
「今度は、鈴蘭も一緒に行こうね？」
「ええ。楽しみにしています。……いってらっしゃいませ、お嬢様」
皆様を送り出した後、私は空を見上げました。雲ひとつない、晴れやかな青空です。
けれどもただ、風だけが、徐々に強くなりはじめているようでした……。

『淑女のドレス』

ほんのりと光沢の入ったブルーの生地。パイピングは上品なゴールド。レースは取り寄せた特級品。

一流の人間は、一流のものを愛し、そしてそれを作り上げた職人に存分に尊敬と対価を支払うべきである……というのは、我が家の家訓でもありますの。

ですから、なんであれ、わたくしは妥協いたしません。いつでも。

「もう少しここはラインをキレイにしてちょうだい。それと、ここにもレースを足して。できますわよね？」

「ええ、わかったわ」

わたくしの注文に、おっとりとプルメリアは答えて、かたわらに膝をつきました。そして、針と糸を手にすると、ドレスの布をつまみ、微調整をしていきましたわ。

「ええ、そうね。こちらのほうがいいわ」

鏡越しにそう伝えると、プルメリアは微笑んで頷きましたの。

わたくしがこうして、彼女にドレスを頼むようになって、もう何着目でしょう。

それは彼女の腕前をわたくしが評価していると同時に、……そうでもなければ、彼女は決して、わたくしからのお金を受け取ろうとはしないからでしたの。

わたくしにしてみれば、困っている人がいれば施しをすることは当然で、むしろわたくしの義務です。しかもそれが、幼馴染みの彼女であれば、なおのこと。それに……。

「弟さんの具合は、いかがですの？」

「最近は落ち着いてるの。明日は、公園まで行こうかしらと思ってい て」

「そう、よかったこと」

……プルメリアには、病と戦っている、弟がおりますの。その弟のことを、彼女はとても大切にしていて、そのために生活が苦しいことなど、ほんの少しも、苦になどしていないようでしたわ。

美しいことだと、思いますの。

たしかに彼女は、その容姿も優れ、温和な物腰は多くの殿方の心を騒がせております。けれどもそれは、いずれも表層。真の彼女の美しさとは、この高潔で、心優しい魂にあるのだと、わたくしは思っております。

「そういえば、知人が水蜜桃を山ほど贈ってきましたのよ。少し持って帰ってもよくってよ。わたくしは、食べ飽きてますの」

今日はとくに、日差しが強く暑い日ですもの。冷えた水蜜桃は、病の人にとっては滋養にもなるでしょうから。

「まぁ、嬉しいわ。ありがとう！　弟が喜ぶわ」

「すぐに持ってこさせますわ。少々お待ちになって」

「ピオニー。……ありがとう」

そっと、彼女は微笑みました。

……知人が山ほど贈ってきたなどという嘘は、きっと、彼女にはお見通しなのでしょう。

お土産の桃と、仮縫いを終えたドレスを抱えて、プルメリアは帰っていきました。

わたくしは、屋敷の窓から、その後ろ姿をそっと見送りましたわ。

――日差しはますます、刺すように強く。

彼女の影は、地面にひどく黒々と、落ちておりました。

光溢れるこのイシュタリアにおいて、不吉なほどの、闇の色。

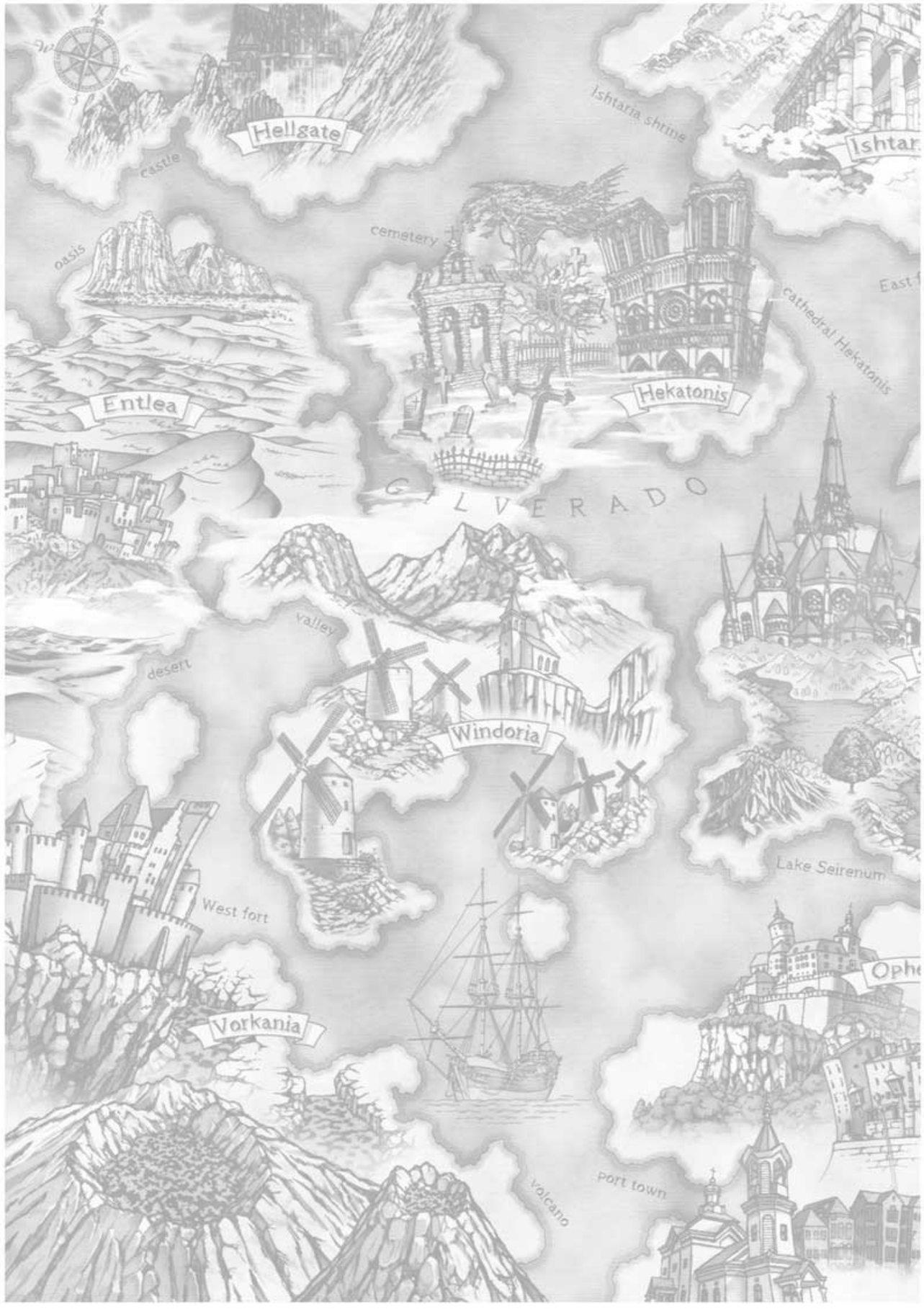
あの色を、わたくしは、生涯忘れることはないでしょう。

『ふたりぼっちの夕べ』

かちゃ、かちゃ。
時々、かすかに、フォークとナイフが音をたてる。……でも、それだけ。
「……」
ロザリーは、黙ったまんま、ご飯を食べてる。
長い、ご飯用のテーブル。でも、座ってるのは、ロザリーだけ。
ゆらゆらとローソクの明かりが揺れて、床に、ロザリーと椅子の影がながーく伸びてる。
そのうち、ロザリーはフォークとナイフを、並べてお皿に置いた。
まだ、ごはん残ってるのに。
「ちゅ？」
ちゃんと食べようよ、って、わたしはロザリーを見上げる。
「なによ。……おやつ欲しいの？　まったく……特別よ？」
ロザリーの白くて細い指が、デザートのオレンジをつまむと、わたしにわけてくれた。良い匂い。嬉しい。思わず両手でしっかり掴んで、ほおばった。すっぱい。あまい。
「美味しい？　ゆっくり食べなさいね」
ふふって、ロザリーが笑った。だから、わたし、嬉しくなる。
わたしは、ロザリーが飼ってる、ハムスターだ。名前は、ルクリアってゆう。ロザリーがつけてくれた。
「……別に、一人でも平気よ。なれっこだもの」
不意に、ロザリーが呟く。わたしにじゃなくて、自分自身に言ってるみたいに。
慣れっこなんかじゃないのに。ロザリーは、とっても、寂しがり屋なのに。
でも、一人じゃないよ。わたしがいるもん。

そう言いたくて、わたしはオレンジを置くと、ロザリーの指先に抱きついた。
「やめてよ、くすぐったいでしょ」
ロザリーの手が、わたしを撫でてくれる。優しい手。大好き。
「おいで、ルクリア」
そっと手のひらにすくいあげられて、わたしはちょっと尻餅をつく。ロザリーの顔が近くなって、嬉しいな。
銀色の髪がきらきらして、きれい。つい触っちゃうけど、ひっぱると叱られるから、気を付けるの。
「ふふ」
微笑んで、ロザリーは明日の予定を話してくれた。お友達に会うんだって。
「ちょっと面倒くさいけど、約束だものね」
わたし、知ってるの。ロザリーがこういう言い方をするときは、本当に楽しみなんだよね？
お留守番は少し寂しいけど、ロザリーが嬉しいほうが、いいから。
「それにしても、やけに寒いわね……。今日は、傍で寝る？」
嬉しくって、ちゅって鳴いたら、ロザリーはまた撫でてくれたの。
わぁい。今日は、カゴじゃなくて、ロザリーとおねんねできる。
たしかに、なんだか、すっごく寒いけど……一緒ならきっと、あったかいから。

知らなかったの。
あの、真っ黒い霧が、少しづつ近づいてきてたなんて。
わたしはこの夜、まだ、全然、気づいていなかったの……。


Hellgate
castle
Ishtaria shrine
Ishtar
cemetery
oasis
East
cathedral Hekatonis
Entlea
Hekatonis
GILVERADO
valley
desert
Windoria
Lake Seirenum
West fort
Vorkania
volcano
port town

ゴシックは魔法乙女～さっさと契約しなさい！～
第0章　嵐の前に
著者　篠原まこと
山内シロウ
挿絵　【yae】
監修　若林明
古川守